

話者

高橋 川崎

しのぶ
みさを

行けざんざん

小国町昔話集

正 田 武 編

話者

高橋

川崎

しのぶ
みさを

行けざんざん

小国町昔話集

正 田 武 編

行けざんざん

小国町昔話集

話者

高橋しのぶ
川崎みさを

- | | | | | | | | | |
|--------------|-----------------|-----------------|------------------|--------------|-------------|-------------|---------------------|--------------|
| 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| こぶとり
(高橋) | ねずみの金搗き
(川崎) | ねずみの金干し
(川崎) | 行けざんざんの梨
(川崎) | ぶさろう
(高橋) | 猿聾入
(川崎) | 蛇聾入
(高橋) | ねずみといたちの寄合田
(川崎) | 猿蟹合戦
(高橋) |

37 34 31 26 22 17 12 9 5

23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10

糠福米福（川崎）

三枚のお札（川崎）

牛方と山姥（高橋）

狐むかし（高橋）

小倉の狐（川崎）

枯木見舞——南の山の兄んにや（川崎）

糸合図——南の山の兄んにや（高橋）

爺婆と黄粉（川崎）

屁くらべ（川崎）

ニシンの寿司——和尚と小僧（高橋）

かい餅——和尚と小僧（高橋）

孝行息子の藤六（川崎）

糸合図（川崎）

化物寺（川崎）

あとがき

84 80 78 74 71 69 67 66 64 61 59 55 49 46 41

凡 例

1 テープにとつたものを忠実に表記したものである。

2 22・23の二つは「山形の民話」24号（昭和46・3）にのつたものであるが、この際入れたもので、川崎みさを姫の原稿によつたもの。他は昭51・8・19に聞いた。

1 猿蟹合戦 — 集成 27 「蟹の仇討」 —

高 橋 し の ぶ

あるどこに猿と蟹いだっけど。そしてはあ、蟹はワサリワサリと這っていただれば、にぎりめし見つけて、拾って、大事にもってだずも。

「お昼になったら食うべ」

なて。ほうしたらば、そのうちに山から猿出てきて、猿は途中で柿の種見つけて拾ってきたずも。ほして猿はすばしこいもんだから、蟹に、

「蟹、ええもの持ってだな、おれはそれよりええもの持ってだ。この柿の種植えでおくど、柿実^なっど、毎年^{まいとし}うまいな食れっぜ、取換えねえが」

て言うたど。ほして騙^なさつではあ、蟹、にぎりめしやつてはあ、柿の種と取換えだっけど。ほうしてこんど、柿植えだば、蟹、大事にして、

柿、柿、早くおがれ

おがんねど、鉢切んぞ

なて、毎日水かけてみたり、さまざましたりして、鉢もつて毎日そう言うていたば、ずんずんおがったずも。そうして間もなぐはあ、なるようになった。

「こりや、ええあんばいだ。実^なったこれ、ほに。赤くなんな何時ごろなんだか」
たのしみに待ちて、毎日眺めっだど。

して、秋になつてはあ、搦いで食つてみたば、うまい柿だ。

「これは来年になどなつたら、なんぼ実^なんだか」
なて。

こんど次の年に、ずっと木おがつてはあ、いっぱい実^なつて、眺めて、こんどは木高くなつて、

「おれ手ではとても搦んねし、誰かに搦いでもらつて食^くたいなあ」
なて思つていたどこさ、猿出て来たずも。

「柿実^なった。お前ど取換えだな、こんなええ柿なつたども、おれ、とても木さ登らんねくて、搦んね。木の小さなうちは、おれ、下で一つ二つ搦いで食つてみた。うまい柿だけでもなあ」

なて。ほしたら猿、

「ほだら、おれ登って搦いで来^くから」

て、登って行つてもいで、自分ばりうまいどこ食つて、そして、

「おれどさも、ちいと落してよこせ」

て言うど、食いがけを落してよこしたり、鼻^は(汁^な)つけて落してよこしたり、

さまざまいたずらしてはあ、しまいに、蟹の甲羅さぶつつけてしまった^ずもな。

ほして甲羅いためらつではあ、泣い^いつだど。ほさこんど、臼に、蜂に、栗に、牛の糞まで来たど。

そしてこんど、

「なして泣い^いつだ」

て言うたば、

「猿ど、柿の種とにぎりめし取換えだば、柿おがつて、こがえになつた^なな、こんど猿に搦いでもらうつもりで上げてやつたば、自分ばり搦いで食つて、しまいに、おれの甲羅さぶつつけて、逃げて行つてしまった。ほんで甲羅いためらつて

泣いっただこだ」

「んじや、おら仇討ってくれつから、まず大事にして、水屋の中さでも入って、お前、治せ」
なお

ほしてこんど、臼は玄関の上さのぼる。牛の糞は玄関の歩き口にいる。それから蜂は流しさ行つて味噌瓶のあたりさ隠つて、栗は囲炉裏の中さ隠れんべし、蟹は流しに居たべし、いたどこさ、こんど猿来たずも。

「何としつた。蟹どの、蟹どの」

ほしたら蟹はだまって、流しさ隠つていだど。ほうしてこんど、蟹は流しさでも行つてと思つて行つたども、蟹の姿見えねんだし、そのうちに蜂、隅の方からぶーんととんできて、刺したずも。

「いやいや、いたい、いたい。こりや味噌でもつけらんね」

て、味噌瓶さ手入れでいたば、水舟から蟹も出はつてきた。こんど、

「こんなどこにいらんね。寒いから火ほげて当んねね」

なて、火ほげつど、こんど、栗ドーンとはじけだずも。

「いやいや、こんなどこにいられるもんでない。早く出はって行かんね」
て、出て行ぐど、こんど、牛の糞さすべりこんだずも。ほうすつど上からこんど臼落ちてくるではあ、びつちよりつぶさつでしまつたずも。ほしてみんなで、
「ええがつた、まず。仇討つたから、早く蟹も出はって来い」
そして、みんな掛りではあ、蟹ば助けて仇討ちしたけど。むかしとーびん。

2 ねずみといたちの寄合田 — 集成34 「鼠と鼬の寄合田」 —

川崎 みさを

むかしあつたけど。

むかし、越前の川原ていうどこさ、ねずみ、栗蒔いたど。して、よく実つたもんだど。

ねずみ、大抵刈る頃になつたべと思つて、行つてみたど。ほうしたらば一本も

ないずもの。誰か刈ってしまったて、

「はてはて、これ、いたましい。誰刈って行つたもんだべ、他人ひとの粟もど、そう思つて来たば、牛いたど。

「牛どの、牛どの、越前の川原の粟知しやねえか、誰刈つたが」
て聞いたど。

「おらは、知しやねえモー」

なて、行つてしまつたど。

こつちさ来たば、犬に行きあつたど。

「犬どの、犬どの、越前の川原の粟刈つたな、お前みだか」

「そんなもの知しやね、わんわん」

なて行くぜす、ほして来たば、鳥に行きあつたど。

「鳥どの、鳥どの、越前の川原の粟も刈つたな、お前みだか」

「粟、知しやない。があがあ」

なて飛んで行つたど。

ほうしてはあ、誰刈ったもんだかと思っただも、もしやしたら、いたちだかなあ
と思つて、いたちの家さ行つたど。

「いたちどの、いたちどの、越前の川原さ粟まいたな、刈ったな、お前^みだか」
ていうたど。

「いやいや、おらは刈んね」

そんな話しつたどさ、いたち子、ちよろちよると出はつて来たど。

「おつか、おつか、昨夜搗いた栗餅食^くだい」

ていうたもの。そうしてはあ、栗盗んだことわかつたけど。それがらはあ、ね
ずみといたちは大仲違えになつたけど。むかしとーびん。

3 蛇 簪 入 — 集成101 B 「蛇簪入」 —

高 橋 し の ぶ

むかしあつたけど。

あるところに、じさまと娘三人いだっけど。ほして、その家では前田千刈、裏田千刈、田持っていだんだけど。

その年は旱魃で、みな前もうしろも田干ひってしまったども、なかなか水掛けらんねがったずもなあ。すつど、じさはあ、水見に行つて、一人ごと語つたど。

「いや、まず前田も裏田もみな干ってしまった。前田千刈、裏田千刈、みな水たくさんに掛けてくれるような人あれば、三人娘持つてだ、どれか一人呉つどもなあ」

なて、つぶやいた。ほうすつど、藪の中から若い男が出てきて、

「おれ掛けて呉れんべ。おれに呉れつか、じさ」
て言うたじも。

「ああ、悪れごと語った」

と思つたども、いうてしまった口引込めらんねもんだから、

「あまりええ、掛けてくれれば呉れる」

て言うたずも。ほして、

「本当は、おれはそこさ住んでいる蛇だども、水かける段になれば、雑作なく掛けて呉れっから、どうしても娘呉ろよ」

て、そういうたど。ほしてこんど、じきに約束すつど、その晩げに、お雷鳴つて、ざあざあと雨降らせてはあ、前も裏もだつぷり溜つたてもはあなあ。ほしてこんど次の日、じさにその若い男来たじも。

「おれ、じさ、約束した通り、前田も裏田も掛けたから、娘、おれに呉れるよ」

「まず、おれ娘に語つてみっから、二、三日返事待ちてくる」

てだど。そして次の朝げ、じさ、

「われごと語つてしまった。これ、蛇だておれ聞いたが、蛇に嫁にやるなていうたて、行くことも出まいし、おれだて、やりたくない。悪がつたことしたもんだ」

と思つて寝つだば、大きな娘、起こしに行つたど。

「じんつあ、じんつあ、御飯出おまつだから起きろ」

「おれは、まず、聞いてもらいたいことがあるが、それ聞いてもらわれれば、起きて食うし、それ聞いてもらわねば、御飯、まず食んね」

「何でも、じんつあ言うこと聞くから、語つてみろ」

「おれ、田の水掛けっだいばかりに、こういうこと言うて蛇に呉れるつもりしたから、行つて呉ろ」て。

「馬鹿語つて、蛇さ嫁に行かれるもんであんまい」
て、ふくれて戻つて行つたど。

こんど二番目の娘、また起しに行つたど。じさ、同じこと語つたば、
「おらも嫌んだ。そんなどこさ行かんね。蛇のかかなくていられつか」
なて行つてしまつた。

こんど三番目の娘、起しに来て、

「姉だち誰も行かねていう、誰だて蛇のおかたに嫁ゆかれねべも、おれはこういう

こと約束してしまつた」

「んだら、おれ行んから、起きて御飯食え、んだども、おれ、何もほがえに仕度いらねがら、ひょうたん千と針千本買つてもらわねね」

ていうたずもな。ほしてこんど、

「あまりええがら、そんなこと、雑作ねことから、ほんじや飯食^まつて買つて来つから」

そしてこんど、飯食つたじし、約束なもんだから来たじしな。

「じんつあ、じんつあ、相談出たべか」

「三番目んな、呉れることにしたから」

そしたば、何時^{いつ}も御祝儀するなて約束して、御祝儀んどき、こんど千のふくべん整えて箱さ入つて、それば長持のようにしておいだごで。

ほしてこんど、蛇賀迎えに来て行つたごんだ。ずうつと山奥まで行つたば、沼あつけど。そさ、先になつて蛇の姿になつて入つたずも。

「さあ、おれ入つたから来い」

て。そしてこんど、

「おれ、まず、もらつてきた道具入つでもらわねねがら、この箱から出して入つでもらうべ」

ほして、こんど、蛇はそのふくべんくわえて、

「これ、沈めて持つてつてくれれば行くども、そうでないば行かね」

ども、沈める氣になれば、こつち浮き、別ななすればまた浮きではあ、とても沈めねでいるうちにはあ、針はばらばらと出はつて、みな体さ刺さつて、死んでしまつたけど。大きな蛇の姿になつて。

ほれから、こんど、

「ああ、ええがつた、まず。これで親孝行したから、家さ帰れる」

と思つて来て、語つたれば、

「ああ、ええがつた、ええがつた。お前のおかげで、ほんではおれも助かるし、この家も立つて行がれつから、前田千刈、裏田千刈はお前のものにして、後継い

でける」

て、じさま、安態して、娘、聾とつて継ぐことに決めたけど。むかしとーびん。

4 猿 聾 入 — 集成103 「猿聾入」 —

川 崎 みさを

むかしあつたけど。

じんつあとばんちやどいだつけど。じんつあは夏の暑い日に、火野さ豆の草取りに行ったど。うーんと草生えで、じんつあ取り立てらんねほど生えつたど。

「いやあ、暑い暑い。この豆の草、ほに、取ってくれる人あんだら、娘三人持つだ、どれが一人呉れつどもな」

て、こう言うたど。したば、ガサガサ、ガサ出て来たど。山のおんつあ。

「じさ、じさ、何語った」

「何も語んね」

「語んねなていうど、こちよばすぞ」

「いや、今、豆の草取ってくれる人あつど、娘三人持った、誰か一人呉れるて、
そう言うた」

て言うど、

「おれ、取ってくれっから、おれに呉ろ」

猿なもんだから、ひゅうひゅうひゅうと取つて、一時に終いっときしてしまつたど。おや

「じさ、じさ、もらいに行んから、呉ろよ」

じさも氣重いども、家さ来て、まず飯食つて寝たど。次の朝げになつて、

「何としたらええがんべ、まず」

と思つてはあ、起きらんねずも。したら姉娘、

「じんつあ、じんつあ、飯出たから、あがれ」

て、起こしに行ったずも。

「御飯食うもええども、にさ、まず、おれ言うこと聞いて呉んねが」

「なじよなごつだが言うてみろ」

したら、

「実は、昨日、豆の草取りきんなに行つて、あまり暑かつたもんだから、この草取つてくれる人に、娘一人くれるて約束した。一人言語ことつたらば猿出はつてきて、草取つてくつで、そき呉んねねごとになつたから、行つて呉んねが」

「何語つていんべ、まず。猿のおかたになてなられつか」
がちやつと戸立てて行つたど。

「はて困つたもんだなあ」

と思つていたば、二番目の娘行つて、また起すど。ほしてじんつあ、またそういう風に頼んだど。

「何もんぼれ語つている。このじさま」

て、枕蹴つとばして行つてしまつたど。そして三番目んな、お花と名付いであつたど。それ起しに行つて、じさはあ、また語つたど。

「猿の嫁になつてくんねえが」

て。ほしたら、「ええどこでねえから、起きろ」

ていうずも。ほして起きてまず飯食まきつたど。ほうしていたば、こんど猿あ新しい手拭いなど、頬かぶりして、もらいに來たど。して、もらわつて行つたずもの。そして次の年の節句になつたど。

「節句札に行きたい」

て、餅搗いたど。そして、「どの重箱、ええ」なて言うずもの。

「いやいや、おらえのじんつあは重箱くさいて、重箱の餅は食ねし」なていうた。

「んでは朴の葉だか」

「朴の葉くさいて食ねし」なて。

「ほんでは、なじよにしたらええが、臼まま背負つて行んか」ていうずも。

「そうしてもらえば、一番ええなあ」て。

猿、臼背負つて來たど。川端通りかかったら、なんぼかきれいな桜咲いっただど。

「いや、きれいな桜だごど。おらえのじんつあ好きなどともなあ」

て、こう言うたど。

「ほんじゃ、おれ、折おしよっから」

て、どっこいしよなて、臼降ろす気になつたど。

「いやいや、土くさいて、じんつあ食ねがら、降ろさねでくろ」
ていうた。

「んでは、背負つて登つか」

背負つて登つて行つて、「この枝ええか」て、手伸ばしたら、

「もうちつと上んな、格好ええようだな」

「では、この枝か」

「いや、その上んな、ええようだな」

て、こう言うたど。そしてそさ手伸ばすどき、裏（先）の方になつたもんだから、ポキンと折れで、臼背負つたまんま、川さガボンと落ちだど。ほうして流れ流れ、

猿沢に流るる命おしくはなけれども

後にのこりし お花こいしや

て、そう言うて流つて行つたけど。そしてお花、家さ来て、じんつゝめに教えたば、「ほんでは、ここの家さ、親孝行だから、お前にゆずるぜえ」
て、家ゆずつてもらつたけど。むかしとーびん。

5 ぶ さ ろ う — 集成 163 C 「おばつしよ」 —

高 橋 し の ぶ

むかしあつたけど。

おとこ

年寄つた夫婦に男子一人いだけど。三郎と名付けて、親衆は年寄つたんだし、何と何と、堅い、じんじの評判の孝行息子だけど。

ほして、その、ここのような、やっぱり不便などで何か買ひものに行く

には、山越して行かんねどころだけど。

そしてその山さ、何か化けもの出るごんだずも、毎日毎日、晩方になつじど、

ぶさろう　ぶさろう

という音すつじ。

「困ったもんだ、買ひものに行かんねに、そんなもの居ては行がんねし、誰か村内の衆こぞつてだら、退治さんねもんだべが」

ていうていたけど。三郎は孝行だし、豪傑の力もちなもんだから、

「おれ、まず、そろつと行つて、様子見てくつから」

ほして、近所の衆、

「三郎、まず、何事もなく帰つて来ればええが、化けものに食んねばええが」
ていう噂立つたずも。

まず、三郎一人で行つて見たど。そしてその峠どこさ行つたらば、やつぱり日暮れになつたれば、

ぶさろう　ぶさろう

ていうていたずも。ほして段々に近づいて見たれば、暗くなつてから傍さ行つてみたれば、こんど、

「ぶさろう、ぶさろうて、誰にぶさりだいなだ。おれ負ぶいに来たから、ぶされ」
ていうた。

「ほんだら、ぶさる。んだども、おれば途中でおろすなよ」

ていわつだずも。

「ほんじゃ、おれ家えまで負ぶつて行んから、ぶされ」

ていうたば、何と重たいわ、重たいわ、どしつと負ぶさつたずも。豪傑なもんだから、ほんでも途中で降さねで、家まで負つて来たど。

「負つて来たども、これ、なじよなもの入つていたんだか、こんな重たいもの。化けものの持つてだもの、何入つていたんだかわかんね。何か危ないもんでも入つていれば悪わるれし、まず土間さでも置くべ」

と思つて、庭の隅さそおつと降すど、ドスンと音したど。

「何背負つてきた、三郎」

なて、親父。

「うん、何たて、おれ戸さぶつつかつたんだ。その隅すまさ置いたから、明日の朝げ見ろ」

なて、そして寝たど。そうは言うてみたども、自分も心配だから、何入つていたか分んね。何か危ないものでもあつど悪れから、おら家の親衆起きねうちに、早く起きて見ねねえて、起きてみたらば、夜明けて見たれば、菰包みみたいなものだけど。ほしてほげて見たれば、何と何と大判に小判に、ざくざくと入つていたずも。ほして、こんどよつく見たれば、

「三郎、孝行だから、大判小判授かるなだ」

て書いてあるもの入つていたけど。ほうして喜んで、まず親衆ば起こして、みんなして、

「おらばり喜んでいねで、近所の衆ば招ばつて、お茶でも飲むか」

なて、近所の衆ば招ばつて、話教えて、そしてお茶御馳走して、

「いやいや、三郎のために、おらも恐おかなくなく町き用達しにも行かれっし、御

馳走なつて、ええがった、ええがった」

て、賞めらつて、そして親子仲よくはあ、一生暮したけど。むかしとーびん。

6 行げざんざんの梨 — 集成 176 「なら梨とり」 —

川崎 みさを

むかしあつたけど。

おつかあが、また子ども生みそうになつたど。ほしたば、行げざんざんの梨食^くだ
いて言うずも。親父あ、

「ほんでは、おれ行つてもいで来つから」

そう言うて出かけたど。してずうつと行つたば、年寄^おつた白髭の生やし^おつたじ
さまに行き合つた。はいつどさ、

「行げざんざんさ行く道、ここであつたべなあ」

ていうたば、

「ほだぜえ、ほだども、これから行くど、大きな牛寝でつから、その牛、尻追つて、一ぺんに起きだら行けばええし、起きねば戻れ」

そして、その次にこんど、

「大きな藤づる張っていつから、それ、デーシと踏んで、切れたら行けばええし、切れねば行くなよ。ほして滝あるどき行つて、行げざんざん、行げざんざんていうたら行げばええし、戻れざんざんて言わつたら戻れよ」

て教えらつたど。そうして行つたば、ほの大きな牛寝つたずもの。「シー、シー」て追うども、決して起きねど。

「あらあ、起きねつたて、行つたてもええがんべ」

どて、行つたど。ほうして行つたば、ほに、太い藤づる、道さ張つてだずも。

「デーシ」と二度も三度も踏んでも切れねども、

さしかえ
「差支ないべ」

と思つて行つたど。ほしたばなるほど大きな滝あつたど。へもどれざんざん、も

どれざんざん」て、その滝は聞えるずも。

「なえだて、丁度この上側だもの」

て思つてはあ、登つて行つたど。ほして行つたば、いや実^なつてだにも。ほれから登つてもぎ方しつたば、ほに、にわか^なに暗くなつてはあ、お雷など鳴つずも。んだども振いでだらば、こんどはあ、向うの方からピカリピカリと光るもの見えつど。何だと思つたらば、それが梨の木の下さ来て、

「この梨もぐ者、上から呑むべか、下から呑むべか」

なて言うずもの。いや恐つかなくてはあ、親父はふるえて、梨さしがみついたど。そうしたば登つて来て、つるつと呑まつでしまつたど。

ほして次の日になつても来ねもんだから、おつか、ほら心配すつど。ほしたら兄^あんにやつこは、

「おれ行つてみつかから…」

て、そう言つて出かけたど。そして行つたば、また年寄りに行き合つたずもの。そしてそういう風に教えて呉つたど。

「牛起きねば行ぐな」

て。ほして行つて、あれだど、牛、（シッ）と追つたば、一ぺんにモクツと起きだど。ほして次に行つて、藤づる（デン）と踏んだば、プツンと切れだど。

「いや、ええがったども」

て、滝の下さ行つたば、（行げさんざん、行げさんざん）と聞えるずもの。

「ああ、ええがった、ええがった」

と思つて、行つてはあ、梨もぎしつたど。ほしたばまた、そんなでも曇つてきたずなだもの。ほうして向うからピカリピカリというもの来て、その下さ来て、やつぱり、

「上から呑むべか、下から呑むべか」

ていうずもの。その子はきかない子ども（勇氣のある子）であつたべちやえ、山やま刀なたさげて行つたんだど。

「どつからでも呑め」

ていうたど。そうすつどワサリワサリと長黒い光るものは、ひとつまなぐ一目の化けもの

て昔はいうたもんだ、それであつたど。そして登つてきて、手つん出すど、その手はあ、山刀で切つたずもの。そうすつど下きドスンと落ちつど、明るくなつたど。ほうして、行つたば訳のわかんね大きな化けものだけど。そうして今度はあ、兄んにやこ、山刀で首さとどめ刺して、そしてまず、

「父親、もしや生きつたかな」

と思つて腹さいでみたど。ほしたば生きでであつたど。

「ああ、ええがつた、ええがつた」

て、はあ、梨は一背負い振ぐ、父親の手ひかえではあ、家さ帰つたけど。行げちゅうどさは行つて、戻れて言わつたら戻るもんだけど。むかしとーびん。

7 ねずみの金干し ― 集成185 「鼠浄土」 ―

川崎 みさを

むかしあつたけど。

じさま、山さ木伐りに行つたど。そして昼飯持つて行つて、ええ空なもんだから、木の切株さ休んでいだど。そうしたばねずみ出はつてきて、その木の下に孔あんなで、その孔さ向つて、「ええ空だあ」て言うたけど。そうしたばいっばいのねずみ出て来てはあ、蓆さ金干したど。ほしてしまいに、地蔵さま持つてきて、

「地蔵さま、地蔵さま、雨降つてきたら教えて呉ろ」

そういうて、孔さ入つて行つたど。じさまはあ、こんどは昼飯食つた弁当入れて行つたジンキチ袋さ、ねずみ干して行つた金、ゾロッと皆入れて、袋一つ、小判干したな拾つてきたど。

家さ来て、

「ばさ、ばさ、木伐りに行つたば、ねずみ、金干してはあ、それ、おれ、袋さつ

めてもって来た」

て、見せつたど。隣のばさ、そしたら来たど。

「おやおや、お前^みだち、こらほどの金、なにしてもうけやった」

「おら家^えのじさ、山さ木伐りに行つてはあ、木の切株さ休んでだば、ねずみ金干して、それこさ持つてきた」

と言^ゆつたど。

「ほでは、おら家^えのじさも行^やんなね」

なて、家さ行つたど。

「じさ、じさ、隣のじさなど、山さ行つて、ねずみの干した金、いっばい拾つて来たから、お前も行つてござれ」

じさはあ、行つたど。そうしてはあ、木伐りもしねではあ、ずるいじさなもんだから、ただ木の上さあがつていたど。そうしたら、ええ空^ゆなんだし、やつぱりねずみ出てきて、「ええ空^ゆだ」て言^ゆつたば、また、いっばいのねずみ出て来てはあ、^{ござ}莫^{ござ}座などもつてきてひろげて、金干して、しまいに地藏さま、やつぱり持つてき

て、

「地蔵さま、地蔵さま、雨降って来たら、教えておくやい」

て、入って行つたど。じさ降りて行つて、金拾うべと思つたども、小便出てき
たど。降りてたれるもめんどうくさいもんだから、その木の根つこの上から、じゃ
あじゃあ、じゃあじゃあたたつたど。

そうすつど、地蔵さま、「雨降ってきた、雨降ってきた」ていうずも。と、ねず
み出て来てはあ、じさ、木から降ちねうちにはあ、みな孔さしまつてしまつたど。
ほうしてはあ、さつぱり拾わねで来たど。

ずるいことて、するもんでないど。むかしとーびん。

8 ねずみの金搗ひき ― 集成185 「鼠浄土」 ―

川崎 みさを

むかしあつたけど。

じさま、山かさ火野のうないに行つたど。ほして、うなつてだば、ねずみ孔見えつずも。何か音するようだと思つて見つたば、中で臼搗ひくような音すつど。じさまで一孔大きくして入つて行つて見たど。ねずみいっぱい集まつて、臼搗ひきであつたど。

ずこいもっこ こんずるす

ひやくとお
百十になるまで 猫の音聞きたくない

ずこいもっこ

と搗ひくど、大判小判もまざつて、ざくざくと落ちつただけど。じさまもはまつてはあ、

ずこいもっこ こんずるす

百十になるまで 猫の音聞きたくない

なて、はま^ひつて搗いたど。

そして帰るて言うたば、お土産だつて、いっぱい小判もらつて来たつたど。そして家さ来て、ばさまに見せつたれば、隣のばさま、また来てはあ、

「なんと、お前^みだち、ころほどのお金、なんとしてもうけやった」

「おら家^えのじさ、火野うないに行つて、ねずみ孔で、ねずみの臼挽^ひき手伝つて、もらつて来たんだ」

て、教えだど。

「んでは、おら家のじさもやんねね、ゴロゴロ寝てばりいる」

て、家さ行つて、

「じさじさ、隣のじさはこうして金もうけて、もらつて来たていうから、お前^みも行つてござれ」

て、やったど。

したら、じさ、火野うないもしねで、ねずみ孔さ入つて行つたど。したばやつ

ぱり挽いていたど。

ずっこもっこ　こんずるす

百十になるまで　猫の音聞きたくね

て挽くど。じさ考えたど。

「これは、ちとばかりもらって帰るより、猫の真似したら、ねずみ皆逃げて行んかも知んねえ、そうせば、これ皆、おれ取って帰られる」

こう思ったずも。

じさ、「にやおー」ていうたど。そうすつど、ねずみども、

「そら、猫来たから、早く孔くけろ」

て、孔びつちりくけらつで、じさ、その中ではあ、出はらんなくて死んだけど。

ばさは、何日経いっかつても、じさま来ねではあ、泣き泣き死んだけど。むかしとーびん。

9 こぶとり ― 集成194 「瘤取爺」 ―

高橋しのぶ

むかしあつたけど。

あるところに、家二軒あつて、一軒のじさは、こぶ出で正直者であつたけど。隣のじさにもこぶあつて、ずるくて欲ふかなじさであつたけど。

そして、こぶのじさま、弁当つめてもらつて、

「今日は、まず、木でも伐つて来つから、弁当つめてくろ」

なて、弁当つめてもらつて、一生懸命で木伐りして、そしてこんど昼眠して、目覚めてみたれば、夕方になつていたずしも。そしたらこんど、夕方になつたし、帰んなねと思つていたら、何だかゴワゴワ、ゴワゴワではあ、何か来た音すつすなあ、

「何来たんだか」

て見たば、踊りはねたずもなあ。脇の方で、よつく覗いて見たば、こんど天狗

だけど。ほして、天狗二人できて、踊りはねだずも。

いとべ ^{いち} 二とべ 一とべ 二とべ

てはあ、同じことばり語って踊っていっずも。じんつあはあ、面白くて面白くて、こんど、暗くなつても家さ帰る氣しねずも。それから、こんどあまり面白いから、おれもはまつてみんなと思つて、

一とべ 二とべ

ていうど、

おれもはまつて 三とべ

て、踊りはねだずも。

一とべ 二とべ おれもはまつて 三とべ

て、ずうつと一晚げ踊ってはあ、天狗はあ、面白^{おもしろ}がつて、

「じさ、じさ、また明日の晩^こげ来い」

なていっずも。

「ほんじゃ、また来る」

「いやいや、来るなて言うたて、当てになんねから、ほんだら、ほのじんつあのそれ、宝物だべも、こぶとつてやったら、それいたましいから、来んべから、そのこぶ掬いで取つてやる」

て、ポツツと、そのこぶ掬が^もつでしまったらずも。

そしてこんど、戻つてきて、家さ来て、婆さに、

「今来た」

ていうたば、「ああ、今来たが、何だ、こぶないな。泊つてこぶ落して来たが」「いやいや、こういうわけで、天狗と一緒になつて踊つていたば、また明日の晩げも来らせたいと思つて、来ないど悪^われがら、こぶ取らつでしまった」

こんど、それ聞いた隣のじさま、けなれぐなつてはあ（うらやましくなつて）、「ほんだら、おれも行つて踊つて来たいから、おれもこぶとつてもらつて来る」て、そして、じさ、行つたらずも。また晩方になつたばはあ、やつぱり天狗二人きて、踊りはじめだど。

一とべ　二とべ　一とべ　二とべ

て踊っていたどこ見て、

おれもはまって 三とべ

なて言うたども、何とも下手で踊れねえ。

「ゆんべなの、じさまでないようだな。これほに。ほだら来ねったてええがら、こぶも何もええから、呉つでやれ、かえつつけなものを来くつことない」

て、こんどはあ、別な方さ、前の晩のじさのこぶ、べだつとくつつけらつてしまった。ほうして家さ、泣き泣き来たど。

「ばさ、まず、おれ、こぶとつてもらうと思つて行つたが、踊り下手だつて、隣のじいさんのこぶも、おれのさ喰つつけらつてしまった」

なて、泣き泣き来たつたつて。んだから欲ばつた、人の真似ざあするもんでないけど。むかしとーびん。

10 糠 福 米 福 — 集成 205 A 「米福栗福」 —

川 崎 みさを

むかしあつたけど。

あるどこに糠福という子ども生んで、おつかさ死んでしまったけど。そして後添えもらつたど。んだげんど、そのおつかさにも子ども生まつだから、米福と名付けたんだど。

して、大きくなつど、おつかさ、自分の産^なした子どもばかりめんごがっこうだずもの。衣裳でもええなは米福に買つてくれつど。して、秋になつて栗いっぱいなつた頃、

「お前だ、二人で、栗拾いに行つてこい」

て言いつけて、糠福には袋さ孔あいたな持たせて、米福にはええ袋もたせてやつたけど。ほして、糠福拾うども、何だか溜んねと思つたば、孔あいていだんであつたずも。ほして、米福は、

「姉ちゃ後さくつついて歩くと拾われっこで」

て、おつか教えてやったもんだから、後くつついて歩くと、その孔から落ちたな、ずうつとあつこんだずもの。んだから米福は一時に拾ったど。いっときほして、

「姉ちゃ、おらいっぱいになったから、おら行くはあ」

て、米福は家さ来たずす、糠福はいっぱいになんねで、ほして栗林の傍に沼あつどこで、しょんぼり涙こぼしていたど。そうしたばその沼の水、がほがほ、がほがほと動いたと思つたれば、大蛇あらわれたつうものだもの。糠福は恐つかながつて逃げんべと思つたら、

「逃げっことないぞ、お前のおつかだ、お前ばむごさくて、おれ浄仏さんねで、こうしていたなだから」

て、そう言うずも。そしてこんどはあ、おつかになって、傍さ来たど。延命小袋と打出の小槌呉つただけど。そして、

「お前、困るようなことあつたら、この打出の小槌ふれば、何でも出るからなあ」
て、そう言うてくつだど。

それをもらつて、まず、栗はば早速袋一つにして家さ歸つたど。ほうしたば、
「糠福、何のごんだ。今頃、米福なの、さっきだにいっぱい拾つて来たぞ」
て、まずおんつあつたど。

そしてはあ、そのうちに町にお祭りあるごつだずも。んで、そこさ芝居師など
来るなんて話あつたど。

それ見みに、米福、おつかどさ、

「連あれで歩えべ」

なんて、喜きんではあ、衣裳も買つてもらつて、連つつでつてもらうことになつた
ど。ほれに糠福は、

「この米搗ういて、それから来い」

なんてはあ、米搗うき言いつけて行つたど。ほして一生懸命で搗ういっだど。ほし
て友だち衆も、

「糠福、見に行かねが」

て呼よばつども、

「おれ、この米搗いてから行くはあ」

て、行かんねつうなだも。一緒に。ほして、ほだどもみんな行つてしまつてから、その米も「早く搗けろ」なて搗いではあ、そして衣裳も自分が着たい衣裳、それ打出の小槌で出して着て、お祭り見に行つたどはあ。

そうして見てたば、こんど米福見つけて、

「おつかさ、おつかさ、あれ姉ちやであんまいか、あんなええ衣裳着て来つたわ」というたど。

「糠福、あんなええ衣裳持たねもの、ほでねえごで」

そつちの方で見つたど。ほしてその人の帰んねうちにと思つて、家さ歸つて来てはあ、知しやねふりしつたど。ほしたばそれ見に、隣村の庄屋の息子も行つてで、その糠福ば見染めたずも。そして、

「あれ、もらいたいもんだ」

なていう話になつてはあ、そこの家さもらいに來たど。ほうしたれば、

「そんなの、おら家の糠福でねえ、米福だべ」

なて、おつかさは言うずも。

「いや、それでなく、糠福の方だ」

て、そういうど。ほうして糠福ば、どうでも貰わねねていうから、呉ったごつだど。

ほして、御祝儀なつじゅうに、衣裳も買つてくんねがつたど。糠福は自分で出して、立派な花嫁になつてはあ、そのあたりは、のりものなてなかつたもんだから、馬さのせてもらつて、そうして貰わつて行つたど。

それ見て、米福、

「おつかさ、おらも行きたいな」

ていうずも。

「あんなええ衣裳着て、おれも馬さのつて見だいなあ」

ていうずも。んだども、そんなこと出ねえんだから、あるうちの一番ええな着せて、脚立さでものせたかして、引張っているうちに、川さ落して死なせてしまつたけど。むかしとーびん。

11 三枚のお札 ― 集成240 「三枚の護符」 ―

川崎 みさを

むかしあつたけど。

おらえの辺りのようなお寺の小僧だちいて、二人、裏の山さ、栗拾いに行くて言^ゆつたど。そしたば和尚さま、

「裏の山には山姥いるから、このお札呉^くつでやつから、追っかけらつたどき、投げろよ」

て、三枚お札もらつたけど。そうして二人で行つて拾つていだど。そうしたば晩方なるまで忘れではあ、拾つていたずも。そうしていたば、何だか婆さま来たずもの。

「にさだ（お前たち）、こんがえ晩方、帰らんねんだから、おら家^えさ入つて、泊れ」て、そう言うて呉れつど。そんな恐つかない婆でもなさそうに見えるもんだから、三人で行つたど。

そうして、飯御馳走ままになつて寝るごになつたど。そして寝て、一人の小僧、ひよいと婆さんのどこさ手やつたば、もじやもじやていうずもの。

「さあ、和尚さまに教えらつたなは、このごんだな」

と思つたど。ほうして隣のば突つついてはあ、二人ではあ、

「ばば、ばば、ばっこ出てきた」

て、こいうたど。

「ほだが、さあ、ほだら逃げつど悪れがら、待て、紐結ゆつけてやつから」

て、そうしてはあ、紐結ゆつけらつたずも。ほして、便所さ入つたふりしてはあ、

キンカクシさ、その紐結ゆつつけだど。婆、

「まだだか」

ていうど、「まだだて言うて呉ゆろよ」て、そう言つて逃げだんだど。ほうして婆

さま、引つぱつて、「まだだか」て言うど、「まだだ」て聞えつずも。ほなもんだ

から、いだども、何度もしても同じ音すつから、起きて行つてみたど。そうした

ば、キンカクシさ紐結ゆつかつていたずもの。

「野郎べら、逃げたなあ」

て、こんどは追つかけたど。ほうして逃げたは逃げたは、そのうちにはあ、追っかけづけられそうになつたずもの。ほうすつど、

「火になれ」

て、お札一枚投げだど。ほうしたば、ぼうぼうと燃えたど。こんど婆さま、熱っちえもんだから、しばらくそこ通れねでいるうちに、小僧たち、走つて姿見えなくなつど消えたど。そうすつどまた婆さま、追っかけてきたずもの。こんどは仕樣ないから、

「山になれ」

て投げだど。大きな山になつたずもの。それ、婆あは越いでは、また追つかれそうになつたど。こんどは、

「川になれ」

て投げて、ほうしてお寺さ、すたすたと駆け込んだど。したば和尚さま、シュミダンの下き隠してくつだど。

そして、婆さま、廊下まで来て、

「和尚、小僧逃げ込んだべあ、出せ」

なて、しやなつど。和尚さま、知しやねふりして、本尊さまにお経上げつだど。
したば、婆、そのお経に負けて逃げて行つたけど。むかしとーびん、びつたりさ
んすけ、かまのふた。

12 牛方と山姥 — 集成 243 「牛方と山姥」 —

高 橋 し の ぶ

むかしあつたけど。

あるところに、太郎、次郎、三郎の三人兄弟いだっけど。

「今のうちに仕度しておかねど、こんどすぐ正月になるな、何もなくていらんね
がら、三人で鯖買いに行つて来っか」

て、越後さ出かけて行つたずも。ほうしてこんど、丁度よく鯖入ったときで、一背負い買つてはあ、帰つてきたど。ほうして峠さかかったれば、まだまだ明るい時間だと思つていたなに、暗くなりはげたずも。そうすつど何だか、鬼婆みたいな出てきて、

「待て、待てえ」

て、おさえらつでしまつたずも。そしてこんど、

「鯖よこさねごんだら、皆一呑みにしてしまふぞ」

なて言わつではあ、鯖、仕方ないんだから一背負いみな婆さあずけたど。ほしてこんど、耳まで割れるような大きい口あいでもんだから、みなツルン、ツルンて、一匹まま呑んでつるつと空にしてしまつて、こんどは、

「待て、太郎ば呑んでくれる」

て、おっかけはねだど。ほして追いつがつでしまつて、こんど太郎呑まつでしまつたど。ほれからちいと行ぐど、まだ追いつがつで、こんどは次郎も呑まれる。三郎一人になつたずも。三郎は一生懸命逃げて、ほして見たらば灯り見えつから、

「早く助けて呉ろ、鬼婆に追つかけらつたから」

て入って行つたらば、きれいな女人おなごひといだつけど。

「今夜、まず一晩げ、こういう婆さに追つかけらつたから、おれば泊めてけろ」

「それはたしか、この主人だべども、んだら仕方ないから、おれ隠すから、ま
ずがさがさていう草屋根のツシさ上がれ」

て、そさ隠さつじやど。オノガラだのカヤだのにかこ囲つた、恐つかねような小屋
だけど。ほしてこんど、その二階さ上がって隠つていたば、そのうちにはあ、鬼
婆来たずも。

「嫁御、嫁御、いま来た。今日は寒がつたども、鯖いっぱい当ったけし、太郎と
次郎ばも一呑みにして来た」

なて帰つて来たど。そしてこんど、

「おら家さ、いま一人来ねがつたが、三郎逃ねがしてしまった」

「そんなもの、来ねっけな」

「んでは、背中あぶりして寝つから、いっぱい火焚け」

なて、焚かせて、そしてこんど、火どんどんと燃えて来たど。そしてこんど、
「甘酒でも温めろ」

なて言うずもの。そして甘酒温めて、カン出たころ、鬼婆、コクリコクリとそこで疲れて眠はじまった。それからこんど、カヤだのオノガラで吹いた屋根だから、それからオノガラとって、それ、甘酒鍋さつけて、上の三郎、吸われるようにして、ツウツウと皆吸わせてしまったずも。

「嫁御、嫁御、おれ今眠ったな、甘酒焚いて、カン出たか」
ていうずも。

「おれも、今寒くて眠てるうちにはあ、ねぶかけして、みな干^ひってしまった。これは申しわけないことした」
ていうたど。

「ほんだら、まだ餅残っていたべ、餅あぶれ」
なていうずも。それからこんど餅焼きた。また鬼婆、ぐうぐう疲れて、そさ眠てしまった。そのうちにまたオノガラさ刺してはあ、上げてやったど。その餅。

そしてまた三郎に食せて、そのうちまた鬼婆、目さめて、

「餅あぶつだか、嫁御」

「はてはて、餅もまず、おれ眠ぶかけしてるうちに、みな焼けた風で、みなワタシ空^{から}だしな」

「んだら仕様ないから、あんまり寒いから、おれ寝ることにする。木の唐戸と石の唐戸あんなだ。どっちに寝たらええんだか」

というずも。そしたら、

「今夜、冷えっから、石より木の方ええべから、木の唐戸さ寝た方がええ」

て、そさ入ったど。そして寝つど、こんど三郎ば降ろして、二人で大鍋さお湯わかつて、わいだどき、キリキリ、キリキリと箱さキリモミして、孔あけて、ほしてこんど、ツタパタして、

「何だか異^いな音すんな、嫁御」

なて、中でしやなつたずも（叫^{かん}んだそうな）。

「向い山のキリキリ鳥、あんまり寒^{かん}じつからだべあ。キリキリ鳥の音だ」

「んだか、ほんでは眠んべ」

なて、眠込んだころ、こんどお湯わいたし、そのキリモミの跡も大きくなつたんだし、そつから、ドッドッ、ドッドッと入つてやった。

「あつい、あつい、早くふたとつて」
なていふども、

「いやいや、おれはさつきな、追つかけらつた三郎だ。鯖も太郎も次郎もみな食つてしまつたから、仇討ちだから覚悟しろ」

なて、どんどんと湯入つてやつてしまつて、とうとう死んでしまつたど。

それからこんど、ふた取つてみたら、狸の化けものであつたど。

「若しかしたら、一呑みにするていうけがら、太郎か次郎か生きつたかも知んねがら、腹さいてみつか」

て、刺^さいてみたら、太郎も次郎も、鯖も一匹まんまで呑んでいたもんだから、みなそのまんまになつていて、嫁御もむごさいがらつて、連^つつて、家さ歸つてはあ、ええ年取りしたけど。むかしとーびん。

13 狐 むかし ― 集成 275 「山伏狐」 ―

高橋しのぶ

むかしあつたけど。

下叶水（小国町）の法印さまは、毎年二月になつど、二月お日待て、上叶水あたりまで来たもんだけど。ほうしてそのあたり、塞の神に、悪れ狐居で、人だまさつではあ、晩方歩かんねどこなんだけど。

法印さま、

「また、おれも狐でも出はっていつど、だまされつど困つから早く行つてお日待して来つから」

て、出かけて来たずも。

ええ日なもんだから、狐、日向ぼっこして塞の神の橋の上さ眠つたど。

「ああ、これは畜生、眠^ねつた。ほんではこの畜生、人ば騙してばっかりいっから、いたずらしてくれる」

と思つて、錫杖もつて来たな、耳の傍でガラガラ、ガラガラて振つたずも。ほうすつど、狐は魂消て、ヒョツーンと飛び上がつて逃げて行つたけど。

それからこんど、法印さま、二渡戸ちゅうはんさ行つて、今日は泊とまりねで、早く切り上げて行くべと思つて、二渡戸あたりで昼飯ちゅうはんすごして帰つて行つたど。ほうして行つたば、土屋あたりまで行くどはあ、まだやつとお昼飯御馳走になつて来たばりなのに、なして暗くなつたんだかと思うほど、途中で暗くなつてしまつたんだど。

「さあ、困つたもんだ。ちようちん借りに行かんね」

と思つていたば、塞の神の橋のたもとに与惣治の小屋の灯あかしだべから、灯し借りて行くべと思つて行つたば、

「おばん、おばん」

ていうたば、与惣治は出はつて来たけど。

「おれ、沼沢まで、暗くて行かんねがら、ちようちん借してもらいたいと思つて寄つた」

ていうたど。

「いやいや、ほだら、ちようちん借すども、おら家の婆さ、腹病みしてて、おれ
医者たのみに行って来ね^こねから、おれ行ってくるうち、留守番たのみたい」
なていう。

「仕方ない、おれ留守番してつから早く行つて頼んで来つどええ」
て、やつたど。

そうして法印さま留守番しつたから、かげの座敷にいたな、

「法印さま、病^やめて切^{せつ}ない」

て、やせた手出してよこすていうなだもの。

「恐^{おそ}つかねえ」

て、引込んだど。そうすつどこんどは、ザボンと川さ落ちてしまったずも。ほ
うして目覚めたようになってみたらば、

「川さ落ちたし、これは仕様ないから、早く上がんねね」

と思つて、上がつて見たれば、こんど、

「湯わいだから、まず、湯さ入れ」

なていわったずも。それから、

「んだら、もどつて湯さ入つでもらつて、それから行くべ」

と思つて、与惣治家^えでは、医者もたのんで看^みてもらつたべし、与惣治どさ来て、湯さ入つていたど。ええ加減でな。

「ええ湯だ、これはええあんばいだ」

てな。ほうしたば、

「何だ、法印。何だ、法印」

なて呼ばつたずも。そしてポカーツと目さめてみたら、塞の神の川の隅で、コチャラコチャラていだんだけど。

若衆ああんまり、来ねえもんだから、法印どこ迎えに来たなだけど。しやなつたな。ほうすつど狐、

「さつきだの、仇、今討つ」

て、大音立^{おおおと}ててはあ、狐逃げて行つたけど。んだから、狐なて、やたらにいたずらさんねもんであつたど。敗けっから、騙すから。むかしとーびん。

14 小 倉 の 狐 ― 集成 278 「狐の立聴」 ―

川 崎 みさを

むかしあつたけど。

むかし、小倉峠さ狐いっぱい住んであつたど。そして狐ども相談したど。

「小倉の太郎兵衛の婆さ、^{（そ）}臍ねえじだから、それまず言うて、御馳走食う工面すつぜえ」

そうして相談してはあ、時のお役人に化けだど。狐ども。ほしてへこんにちはあゝなて行つたど。

「こっちの家の婆さま、臍ないちゆうごんだが、それ調べることになつて来た」
て、こういうたど。

「ほんなどこ見せねねごんだら、切ないごんだ」
と思つてはあ、

「まず、お役人さま、寄つておぐやれ」

て、寄せではあ、

「何御馳走したらええんだか」

て、こう言うたど。ほしたら、

「油揚げと油餅の方、ええな」

て、こういうずも。

「はあ、そんなことは雑作じょうさくねごつだから、ほんでは、御馳走すつから、まず寄つておぐやれ」

て、臍見らんね工面すんべと思つてはあ、食いだいていうもの拵えて御馳走したど。ほうしたば、狐共なもんだから、腹いっぱい食つたずもの。臍のこと忘れではあ帰ってしまったずもの。

ほして、小倉峠さ帰つて来て、踊り出したど。

太郎兵衛のかがは、

へそなしかがで、

油揚げに油餅

よっぱら すっぱら まぐらった

てはあ、くりかえしくりかえし踊ってやったけど。むかしとーびん。

15 枯 木 見 舞 — 集成 337 「枯木見舞」 —

南の山の兄んにや

川 崎 みさを

むかしあつたけど。

南の山の兄^あんにや、嫁もらつたど。ほして二人で正月礼に行くちゅうだど。それ
したれば家の衆、

「さあさあ、あの、向うの家さ行ったら、立派な焼き物あっちけがら、それ賞め
ろよ。南京焼火鉢だっけがな」

ていうがら、

「こう、はんじえで見て、ええ音すんべから、そんな時そういうて賞めろ」

て、教えらつて行つたど。そうして行つてはあ、

「けっこうなお正月でござる」

なて、まず挨拶したど。やっぱりその火鉢出でてあつたど。ほしてはじえたらチーンと音したど。

「いやいや、ええ火鉢だごど、これは南京焼だべか、唐焼^{から}だべが」
て、こういうたど」

「南京焼だ」

て、はあ、その親父、大變に得意氣だど。

「おやおや、この野郎、馬鹿だと聞いてたが、そんがえ思つたほど馬鹿でもねえぞ」

と思つて喜んでだど。そのうちに寒い日であつたもんだからはあ、じさま寝つだなな、起きて来たど。

「いやいや、さむくてさむくて、ちいと腹あぶりすなね」

て、起きて来て、立て膝して、もったもの出したど。吹きの寒い日なもんだか

ら、てろてろに光ってだど。ほうすつどその兄んにや、

「これもはじくなだべか」

と思つて、

「南京焼だべか、唐焼だべが」

て、こう、はじいたずも。さあ、痛くていたどこ、はじがっだもんだから、じさま、「いたい、いたい」で、縮んでしまったどはあ。それみたば親父はごしやえで、

「こんな聳さは、とても娘呉つておがんね」

て、取っぱがさつで、しおしおと家さ帰ったけど。むかしとーびん。

16 糸 合 図 — 集成 345 「糸合図」 —

南の山の兄んにや

高 橋 し の ぶ

むかしあつたけど。

南の山の兄んにやさ、里からおかたもらつたけど。ほして今度、人並みでないもんだからはあ、盆札に行くときも、おかた心配して

「明日は盆札に行くども、大勢人集^{あした}ばつから、そんどき下手なこと語つて笑われつから、何もめんどうなことを語つことない。おれ、あの、大事なもののさ糸縄つけておつから、それ、ちよえつと引張つから、そしたらへ左様でござり申す」て言え
ばええから、そう言えよ」

ていだど。そしてはあ、大勢集ばつて、さまさま話しているうちにはあ、へ左様でござり申す、左様でござり申す」ていうもんだから、

「馬鹿だなて言うども、こがえに素直にへ左様でござり申す」て返事するもの、
めんごい兄んにやだ」

なて思つて、みんないだど。ほしてこんどはあ、かか便所さ行きたくなつたもんだから、ちよいつとその糸繩の端、下駄さ結^ゆつけで行つた。そしたら猫の子いたな、じゃれではあ、くつくつと引張らつじも。そんでこんどへ左様でござり申す、左様でござり申すて、かか引張んなだかと思つていう。そのうちにはあ、あんまりじゃれだば、痛くて、へ左様でござり申す。左様の首が抜けそうでござり申すて、そういうど。そうすつど、かかもどつてきたどこみんな氣付いてはあ、「馬鹿だということは聞いたども、こんな馬鹿なこんでは、とても呉つておかんね」

なてはあ、娘いたどこではあ、とても駄目だからて、取つぱがさつだけど、可哀そうな目したけど。むかしとーびん。

17 爺婆と黄粉 ― 集成 388 「爺婆と黄粉」 ―

川崎 みさを

むかしあつたけど。

じさ、朝げ早く起きて、お庭掃いだど。大きな豆、ごろごろと転んだど。喜んで拾ったど。

「ばさ、ばさ、こんな大きな豆拾ったから、まず半分は種、半分は豆のこ（黄粉）にすつぜ」

ほうしてはあ、まずガラゴロと煎って、はたいたども、あまり貧乏であつたべちやえ、篩持^{ふるい}たねがったど。

「はたいだども、まず篩ないし、隣の家さ行って借りれば、みち子さんが甜めだいていうし、新しい家さ行けば、千代子は甜めだいていうし、いつそのこと、おれ禪、この間買ったばかりだし、禪の端でほろぐが（ふるうかな）」

そういうたど。そして禪の端でふるってだら、じさま屁出てきてはあ、大きな

屁ブーンとたれだど。その豆のこは皆ふつとんで行っただ。ほうして向い山の笹葉さくつついでしたたど。ほうすつどはあ、近所の子どもは餅あぶつてもって行つて、

じんじの屁の実はうまいな

じんじの屁の実はうまいな

て、つけて食ったけど。むかしとーびん。

18 屁くらべ ― 集成 493 「屁ひり較べ」 ―

川崎 みさを

むかしあつたけど。

殿さま、屁のたれくらべしてみろていうこと、触れ廻したど。したら備後のじさど、丹後のじさが、

「おらだ、たつでみる」

て、きたど。ほうして備後のじさまは、

びんごびじまのビコビコのビー

て、たつだ。丹後のじさまは、

たんごたじまのタンタコタンのタン

て、たつだど。

「いや、上手だ。どっちも上手だ」

て、双方、御褒美もらったけど。むかしとーびん。

19 ニシンの寿司 ― 集成 535 「餅は金仏様」 ―

和尚と小僧

和尚さまと小僧いだけど。その小僧は賢こい小僧だけど。和尚さまは時々、ニシンの寿司出して食うども、小僧に呉んねじも。

「いっぺん食つてみたいなあ」

て思うども、なかなか和尚さま呉んねんだし、和尚さま、隣村の法事に頼まっで行ったから、そんで、

「今日こそ、おれ一人だから食つてみんべ」

と思つて、流しの方さ行つて戸棚あけてみたば、いっぱいニシンの寿司あつから、食つたじも。食いはねだば、とてもうまくて止めらんね。みんな食つてしまつたど。ほれからこんど、何として言いわけしたらええべと思つて、考えて、寿司で、御飯炊いて糍まぜて塩合せて甘味つけて、それで魚はさんでつけたもんだべな。その飯のどこはあ、本尊さまさついでで、かんづけて呉れんべと思つて、べっ

たりと口さ塗っていたずも。

ほして、こんど、和尚さま来て、

「小僧、小僧、今来た」

また、和尚はあ、寿司で一杯飲むべと思つて見たらば、寿司なくなっていたずも。「小僧知しやねが」ていうたら、

「おれは知しやね、そんな戸棚など開けねしな」

なんていうごんだべと思つていたらば、こんど寿司の飯、ポロンポロンとはあ、本堂の方まで落ちつたじも。小僧落してなあ、そして行つてみたれば、本尊さまの口さ、よつぽど付ிட்ட。

「ほんでは、この本尊さま食つたなだな。小僧、ほに、おれ居ねうちに、寿司など食つて小僧にも食せねんだんだ。叩いてくれるから表さ出はれ」

なて、ガラガラと本尊さま出してはあ、家の前の池さ入れだじも。そうすつどクッタクッタ、クッタクツタて、その口から水入っこんだ。

「ほら食つたべあ、こんど上げて叩いてくれる」

て、上さあげて叩くと、カチツと叩くど、金^{かね}なもんだから、カーン、カーンていう。

「まだ白状しねが、まだ水さ入れてくれる」

水さぶつ込むと、またクツタクツタ、クツタクツタて。何度入れてもクツタクツタて言うべし、上げればカーンだし、そこではあ、和尚さま、小僧負けではあ、小僧の智恵で、叱られつこと逃れたけど。むかしとーびん。

20 か い 餅 — 集成 595 「標の石」 —

和尚と小僧

高 橋 し の ぶ

むかしあつたけど。

和尚さまと小僧いだけど。賢こい小僧であつたども、なかなか和尚さま、自分ばり食って、そばかい餅、毎日毎日、一日一ぺんは好きで食ねでいれね和尚さ

まだけど。

「おらも、ちつと食たい」

なていうども、

「いやいや、おれみたい和尚になつど毎日食れつから、小僧のうちは食せらんね」
そして毎日、自分ばり食つて、小僧食だくていんな、ある日、隣村の法事さ和尚さま頼まつで行つたど。雪の降る日であつたど。そしてこんど、和尚さまの姿見えねぐなつどはあ、かい餅鍋かけてはあ、かい餅拵えだじも。そしてあんまり拵えずぎで、皆食んねがつたど。

それからこんどはあ、そのかい餅の残つたのはあ、どつさり雪の中さ埋めてしまつて、そして鍋きれいに洗つて伏せで、かい餅埋めたところで小僧歌詠んでいたずも。歌の好きな小僧であつたから。そしてその上さ糞たつたど。

雪ふりてしるしの糞も見えざれば

そばかい餅はいかになるらん

て詠んだど。

和尚さま、そこに来て、

「何しった小僧、何か歌詠んだか」

「あんまり雪降ったから、雪降りてしるしの松も見えざれば、わが古里はいづくなるらん、とそう詠んだ。家さ行ぐとき、途中にある松も今日は見えねえようだ」

ほして、こんど、和尚さまも負けてしまったちゅうだごで。

「お前も里恋しいだろうから、家さ帰って休んで来るように」
て、泊りに行かせたど。むかしとーびん。

21 孝行息子の藤六 ―「二十四孝」―

川崎 みさを

むかしあつたけど。

父親と息子いで、その息子、藤六と名付いであつたど。んで、こんど父親が病氣になつて、寒のうちに、寒のうちの鮎食^くだいの、たけのこ食^りだいのつていうごんだずもの。んで、

「蒲沢さでも行ったら、あるがしら、行つて見でくつからなあ」
て出て行つたど。

そうして山の神に根雪浅いから、ここらにあつかと思つて掘つてみたば、見つけだど。まず筍掘つて、

「いや、まずええがった。これは、筍は手に入つたども、鮎とられんべかなあ」
と思つて、蒲沢沼さ来てみたど。そうしたら氷張^{ざり}つていたずも。そうして、
「これは困つたなあ」

と思つて、まず、帯といで自分の腹押つつけで温めたど。その氷なあ。ほうしたば何だかゆるんだようだと思つて、唐鍬で叩いたど。そうしてかましたば、鮎ひよつんと上がつて来たらずもの。

「いや、ええがった。ふなも採れたし、帰んべ」

と思つて来たど。そうして来たらば、まだお日様あるつもりなな、暗くなつてしまつたらずも。

「困ったごんなもんだ。だいたい、こっちの方角なようだけでも」

て、とぼとぼと来たば、向うに灯り見えつど。

「いや、こんなどこに家あつたけが」

そう思つて、まず松灯の一本ももらうかなあと思つて寄つたど。ほして、「こん

ばんは」て言うたば、年寄りの親父いでやつたど。ほして、

「まず、暗くなつて行がんねぐなつたから、あまりおしよしだども（本当に申しわけないが）、松灯一本呉つておぐやんねが」

ていうたば、

「ええどこでねえぜ。んだども松灯呉れる代りに、おれ頼みも聞いて呉ろ」

こう言わったど。

「あまりええ」

ていうたば、

「おれ、つれあい、まず昨日死んだども、この雪ではあ、おれ仕末さんねでいる
どこだから、悪れども、雪の上、穴掘るもひどいし、お前持つて行つて川さ投げ
てくんねえか」

て、頼まつたど。ほして、

「困つたもの引受けたもんだ」

と思つたどもはあ、灯しらわねば来らんねもんだから、引受て背負つたど。

重たいがつたども、来て、ほしてあんばいええ崖あつから、こゝらで投げて下ろ
すかと思つて、おろす氣になつど、

「藤六、藤六、投げんべと思うなよ」

て、こう言わずも。ほうすつど仕方ないから、いまつうと（少し）背負つてと

思つて背負つて、こつちさ來た。またあんばいええどこあつから、おろすべと思ふど、また、

「藤六、藤六、投げんべと思ふなよ」

こつち言はずも。仕方なくてはあ、おろすべと思ふどそう言われて、つい家さ來てしまつたど。

「明日なつたら、誰も起きねうちに、前の川さ流すべ」

そう思つてはあ、庭土間さおろして、そうして入つたど。ほしたば、何、暗いなどなく、まだ薄明りのあるうちであつたど。ほしてまず家さ入つて、

「おどつつあ、おどつつあ、鮎も筍も採つて來たぜ」

そうして食わせたど。喜んで、

「寒の鮎はやっぱりうまい」

なてはあ、喜んで食つたずもの。ほして次の朝げ、

「まず早いどこ、みんな起きねうちに背負つて行かんね」

と思つて、庭さ行つてみたど。そうしたば庭いっばいさ金ひろがつていたつた

ど。

「いやいや、これは昨夜ゆんべなの、死骸しがいないくて、金ばかりだ」
て、そういうたば、父親、

「おまえ、親孝行なさ、神さま授けて呉くっだんだごで」
そう教えて呉っただけど。むかしとーびん、びったりさんすけ。

22 糸 合 図 — 集成 345 「糸合図」

むかしあつたけど。

南の山にお嫁さんもらう年ごろの兄いだっけど。ある人の仲人で遠つがいどつから、そしてとてもいい家から、兄にはもったいないほどのお嫁さんもらったけど。そし里帰りに行くことになったじもの。そしてはあ、二人で出かけたど。途

川 崎 みさを

中まで行くと、嫁っこが、

「兄んにや、兄んにや、おらえさ行ったら、あまりやたらに喋んなよ」

ていつて、チンチンに糸縄つけ行つて、

「おれが脇にいて、いい頃引張つから、そんな時、へさようでござる」と、こう言うように」

て教えてつれて行つたごんだど。そしてまず、はじめはうまく挨拶も出来たので、向うのおとうさんも、少しうすのろと聞いたが、これぐらいなら、まずよがんばると思つてだど。そのうちに嫁っこがオシッコ出たくなり、ちよいと立つてまず糸縄を下駄に結つて行つたごんだど。その家に犬っこ飼つてであつたじもの。その犬っこがそれを見つけてじやれたど。そうすつど兄は、

「さようでござり申す」

というども、何度も何度も引張られるので、しまいには、切なくなつて、

「さようの頭がもげそうでござる、さようの頭がもげそうでござる」

といいながら、何度も何度も頭をさげていたところに、嫁っこはもどつて、た

まげる、親父は怒って、せっかくもらった嫁は取り剥さつて、しおしおとわが家に帰って行つたけど。むかしとーびん

23 化物寺 ― 集成 259 「化物寺」 ―

川崎 みさを

むかし、おらえのあたりのようなところに、古い寺があつたけど。そしてそこに来る和尚さま、来る和尚さま、喉をみんな食いちぎられて殺されつこんだじもの。

ある日、なんだか賢こそうな旅僧がその村に来て、その話をきいて、
「よし、そんなではおれがその化物退治してやっから、おれどこをここのお寺の住職にしてくろ」

なんていったど。年寄たちは、

「とても駄目だから、やめろ」

というども、聞かないで、まずお寺さ泊めることにしたど。そして旅僧は大きなフクデ餅一つ呉っでけろて言うたど。どこの家にあつたが、やったじもの。

そして夜になつて旅僧は火を焚いでそのフクデ餅をワタシに上げたら、「こんばんわ」なて言いながら、一人の和尚さん現わつたど。そして、

「おればも、当らせてくろ」

なんて入つて来たど。そしてさまさまの話をしかげつじもの。しまいに、

「おれと術くらべしないが」

なんていうたど。旅僧は、

「ほんだな、おれも、ちつと知つてだが、まずお前からやつてみる」

ていつたど。

「あんまりええ、そんではまず大入道になつて見せつか」

なんて、身成りを一ゆすりすつど、六尺にもなつたど。旅僧は、「ほほう、それだけか」ていうど、「いや、まだまだだ」て、また一ゆすりて天井板まで届きそう

になった。そうすつど旅僧は上を見ないで、

「いや、これはおどろいた。だが大きくなら、おれもなれるが、小さくは、ちいとむずかしいもんだが、なれつか」

ていうた。そうしたら、そんなことは造作ないなんて、こんど克蘭克蘭と、とつくり返り、三尺ばかりになった。旅僧は、「なんだそんなものか」ていうど、また克蘭克蘭としたら、こんどは小さく小さく豆ぐらいになった。そうすつど旅僧はやにわに握んでフクデ餅の熱く焼けた中に押し込んだら、キヤーツて逃げて行つた。そうこうしてうちに夜が明けて、村の人たちあ、旅の和尚さま、生きつだか死んだかなんて、ガヤガヤ来たごんだ。そして和尚さま、

「和尚さま、和尚さま、何ごともなかったが」

なんて聞いたら、コロコロ転んだと語りあれはきつとミコシイタチだと思う、おれに熱いフクデ餅に入れられ、火傷したべがら、なんだか裏の方さ行つたよ。うだから、行つてみんべなんて、みんなで行つてみたら、やつぱり穴があり、そ

の奥の方でウンウンうなってる声すんので、唐鍬なんか持ち寄って掘ってみたら、やっぱり毛も白がかった古ミコシであつたど。前の旅僧たちは大入道になつたとき、見上げて喉を嚙みつかれ、血を吸い取られて死に死にしたのであつたべ。

この旅僧は村の衆にうやまわれて住職になつて安態に暮したけど。むかしとーびん。

あ　と　が　き

高橋しのぶ、川崎みさを軀のところに、五年ぶりにおとずれたのは、夏休みも終りに近い八月十九日のことである。久しぶりの快晴であり、それよりも五年ぶりの再会に、伊佐領の駅に降り立って小一時間も待たなければ発車しない国鉄バスをうらめしく思った。たしか五年前に、駅前の道路で子どもが三人、石けりをして遊んでいたが、その日は明日が二十日盆という日で、故郷から都会に帰る人と見送る人が集まり、この田舎駅もいくらかにぎやかであつたが、それがみんな大人の声であつたためか、変にそぐわない感じだった。それでもバスにのると、下叶水まで一緒に母子があり、白い田舎道の新鮮さが、まわりの緑の中で、私のところを明るくした。下叶水から東側に入るバスの右手、西側の道路にはキリスト教学園の校舎が見え、家々が点在し、いかにも夏の山村を思わせる。そこから十分もすれば大石沢だと思つくと、バスの通るのを、道の脇によけて待つ人に手をふりたいような気持である。川崎家、次いで高橋家があり、そこから二十米ほど

のぼった広場がバスの終点である。もうお二人が家の前で待っておられた。

昔話はたちまち二十話をこえた。「もう昔話でなくて、ぶらっと遊びに来られえ」という。話が一段落して、今日が祭りだという二渡戸川の向いの小高い稲荷社の参道から部落の写真を撮った。赤い稲荷の旗が風になびいていて、小さな祠の前に菓子とお神酒が上がっていた。

国鉄バスは朝夕二回の往復だから、ゆっくり話をきき、お二人の元気な姿を拝見して、すっかり安心してしまった。帰りには大きな箱にワラビとホウキダケをいただいた。それに干したキクラゲもいただいた。それ以上に、こんな豊かな庶民の文芸たる昔話をこんなにたくさんいただいて帰るといふ喜びで、再び国鉄伊佐領駅での一時間の待合せは少しも苦にならなかった。

早くガリ版をと思い、他の仕事を一切放って、ようやく今ガリ版を終える。うれしいことしきりである。両家に深く感謝するものである。

昭和五十一年九月五日 夜

武 田 正

行けざんざん 小国町昔話集

編 武 田 正

山形県南陽市赤湯三、一八〇—四

発行 昭和五十一年九月十日

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十九年四月一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三三―六八八―七五四四